

# 特攻隊写真 貴重な一枚

## 「第76振武隊」

### 菊池飛行場に駐留部隊名初確認

第2次世界大戦の末期、沖縄戦に向かう前の特攻隊「第76振武隊」の隊員らを撮った写真が見つかった。撮影場所は菊池市。特攻隊の待機場所の一つだった菊池飛行場が菊池市泗水町にあった。「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」の高谷和生代表(67)＝玉名市＝は「菊池飛行場で部隊名が確認された初めての振武隊の写真。貴重だ」と話す。



丸山順子さんが所有していた特攻隊員の写真(丸山さん提供)

写真は、熊本市北区津浦町の丸山順子さん(87)が保管していた。丸山さんによると、小学生のころ、指導を受けていた日本舞踊の師匠らと共に菊池に特攻隊員を慰問した際の写真。全員で29人が写り、武者に扮した女性3人と、丸山さんを含む白鉢巻をした少女3人以外は男性で、ほとんどが陸軍の飛行服姿だ。

丸山さんは、隊員から辞世の句をしたためた短冊も受け取っていた。短冊は、写真に撮った後、護摩供養した。短冊の写真から「純情 岡村中尉」の文字が読み取ることができたため、高谷代表は、これを手掛かりに調査した。

調査の結果、写真中央で女兒を膝の上のせているのが、兵庫県加古川飛行場で編成された第76振武隊隊長の岡村博二中尉(享年23)と分かった。

振武隊は、陸軍第6航空軍隷下の特攻隊の総称で、鹿児島県の知覧飛行場(南九州市)や万世飛行場(南さつま市)から飛び立っている。1個部隊は基本的に

12人編成で、連番の2個部隊で行動することから、集合写真には76振武隊のほか、同日に出撃した77振武隊が写っていると推察されるという。

岡村中尉は1945年4月28日、知覧飛行場から嘉手納沖(沖縄県)の米艦に特攻攻撃し、亡くなっている。部隊の移動日数を勘案すると菊池飛行場には4月25日前後に駐留しており、慰問の時の写真はその間に撮影されたと思われる。撮影場所は菊池神社と推測できると、特定には至っていない。

知覧特攻平和会館(鹿児島県南九州市)には、76振武隊のマークが塗装された97式戦闘機が屋外展示されており、高谷代表は「さらに調査を進めれば、76振武隊や岡村中尉についてもっと詳しいことが分かるかもしれない」と話す。

丸山さんは写真などの資料を菊池市中央図書館キックロスに寄贈する予定。くまもと



丸山順子さん

第76振武隊の写真を保管していた丸山順子さん(87)は、沖縄戦に飛び立っていった特攻の戦闘機が、上空を旋回して南に消えていった様子をはっきりと覚えている。

丸山さんの実家は、熊本市中央区南千反畑町の医院だった。79歳で亡くなった父親の松本定太さんは小児科医で、軍医の経験もあった。軍人とも親しく、菊池飛行場

に滞在していた特攻隊員が熊本市に買い物に来た時、よく家に立ち寄った。「隊員さんにはたくさん軍歌を教えてもらった。今も歌える」

菊池市に待機する隊員たちを慰問した際、隊員の1人が「出撃の日には、順子ちゃんの家の上を旋回してハンカチを振るからね」と約束してくれた。その日は、青空が広がっていた。

## 「戦争伝える責任果たす」

写真保管していた丸山さん(熊本市)

銀翼の飛行機が丸山さんの家の上空を旋回。白いハンカチが振られているのが、はっきりと分かったという。丸山さんは、両親と一緒に機体が見えなくなるまで空を見上げていた。

消えない戦争の記憶は特攻隊だけではない。空襲にも遭った。ひどいやけどを負って、定太さんの治療を受ける人もたくさん見た。今年には終戦から77年。「戦争を思い出して、いまも眠れない夜がある。セミの声を聞いたときも、戦争のことが頭をよぎってたまらなくなることもある」

人生を振り返りながら「戦争を伝える責任を果たしたい」との思いを強くしていた中、ロシアのウクライナ侵攻が起きた。特に子どもたちの窮状を伝える報道に心が痛む。小児科医だった父の姿を思い出しながら、何か支援できることはないか考えている。「生き続けているうちにまた戦争を見ることになるとは思っていません。やっぱり戦争はいけないと、体験者として伝えていく」

(熊川果穂)